新規ビジネス創出のキーワード「ケミストリー」

東京大学名誉教授
月尾嘉男（つきお よしお）

昭和一七（一九四二）年生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。コンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策等を研究するとともに、全国各地で私塾を主宰し、地域の有志と共に環境保護や地域計画に取り組む。

新規の物質を生成するケミストリー

ケミストリーという言葉は現在の日本では二人の男性によるヴォーカルグループの名前として有名であるが、本来は化学反応とか化学現象という意味の学術用語である。中世には複数の物質を合成して黄金を生成する技術の研究が流行し、それをアルケミーと命名し、それを実施する人間をアルケミスト（錬金術師）と名付けたことが語源である。そのような背景から発展し、ケミストリーは現在では産業にとって重要な技術になっている。

水素と酸素を混合して容器に封入し、そこへ電気火花で点火すると真水が生成されるという実験を中学や高校の理科の授業で経験するが、これがケミストリーの一例であり、複数の物質を一体にして反応させると、それぞれの物質とは相違した性質の物質に転換するという特徴がある。そこで最近、ビジネスの分野で、相互に関係のない仕事を一緒にして新規の仕事を創造することをケミストリーと名付けるようになった。

成功しているケミストリービジネス

スーパーマーケットは食材を中心とする素材を販売するのが本来の仕事であるが、最近、店舗の内部にレストランを併設するスーパーマーケットが増加してきた。一例として「成城石井」は内部にレストラン「SEIJO ISHII STYLE」を併設し、店内で販売している素材を使用したハンバーガー、ステーキ、パスタ、ピザなどを提供している。これは素材販売と食事提供のケミストリーで、店舗全体の付加価値を増大させている。

明治時代に日本で鉄道が開通した初期には急行は人気がなかった。乗車すること自体が娯楽だったからである。しかし鉄道は高速になり、東海道新幹線などは窮屈な座席で睡眠するための手段になっている。ところが近畿日本鉄道が車内の内装も豪華で座席も余裕のある観光列車「あをによし」を投入して近畿地方一円で運行させたところ、人気列車になっている。従来は分離していた移動と観光のケミストリーが実現したことになる。

コロナウイルス蔓延（まんえん）の結果、宿泊業界は苦戦している。蔓延以前の二〇一九年と比較すると、国内の旅客は一〇％から二〇％、海外からは壊滅状態である。そのような状況で客数を維持しているのがブックホテルと総称される宿泊施設である。箱根に出現した名前も「箱根本箱」は、ロビーの両側が天井まで書棚で、部屋にも本棚が用意してあり、全館に一万二〇〇〇冊ある書籍は購入も可能である。旅館と書店のケミストリーである。

東京や大阪など巨大都市に企業と人口が集中した時代には、高価な都心の土地を有効に利用するため、オフィスビルは事務所用の空間を最大にする設計であった。しかし都心への集中が緩和し、テレワークも普及した結果、最近では内部に医療施設、スポーツ施設、レストラン、さらには入浴施設まで開設するオフィスビルが登場してきた。勤務する人々の価値が労働本位ではない変化に対応したケミストリーの出現である。

この動向は居住施設にも反映している。戦後の住宅不足時代の団地の集合住宅は住戸のみで構成されていた結果、地域社会という生活形態が醸成されなかった。しかし現在では人口減少や地方移住の影響で余裕ができてきた。そこで高層集合住宅の一部をスポーツジムやバーラウンジにしたところ、住民の交流が活発になり、住民演奏のコンサートが開催されるほどになった。ケミストリーが空間と住民を変質させたことになる。

廃物をケミストリーによって蘇生させる活動も活発である。過去二〇年間で廃校になったが建物は現存している学校が約七四〇〇校にもなり、活用されていない校舎は二〇〇〇校近くになる。空家は桁違いの多数で全国に約八〇〇万戸が存在している。これを再生利用するのは新規のビジネスになっており、宿泊施設、ベンチャー企業オフィス、撮影スタジオ、スポーツ施設などに転用され、地域の中核施設になっている。

ケミストリーが創出する未知の産業

日本で最初の国勢調査が実施された一九二〇年の就業者数の割合は一次産業が五四％、二次産業が二一％、三次産業は二五％であったが、一〇〇年が経過した二〇二〇年の調査では、それぞれ三％、二三％、七四％と激変している。しかも七四％のうちの二％は分類不能の産業である。二％は人数にして約一一〇万人に相当するが、一〇〇年前には想像できなかった産業が急速に登場してきたことを意味している。

アメリカ化学学会のデータベースには人間が発見や合成した化学物質が登録されているが、二億六〇〇〇万種類以上になっている。五年前には約二億種類であったから、この五年間で六〇〇〇万種類が増加したことになる。それは化学技術、すなわちケミストリーの発達の結果である。分類不能の産業が二％になったのも産業のケミストリーが胎動し始めた結果と推定される。ぜひ未知の産業を誕生させていただきたい。